

「身近な地域の環境学習」に地図を使おう

千葉県公立中学校 富澤 眞也

環境学習の課題は、どのようにしたら生徒が主体的に環境について考え、理解し、よりよい環境づくりのために行動することができるかである。そのためには、効率性や利便性、物質的な豊かさを追求してきたこれまでの私たちの価値観や社会・経済システム（20世紀型の文明）をあらためて見直し、考えなおす必要がある。しかしながら、物質文明の中で生活し、その恩恵を受けている生徒たちにとって、環境問題は、新聞やテレビなどで環境について報道されたり、社会科や国語、家庭科で学習して知っていても、生徒の身近な生活には、あまり直接的には影響を及ぼさないため、それほど切実には感じられていないようだ。

そこで、身近な地域の環境学習では、次の

①～④のプロセスで取り組もうと考えた。

①まず、身近な地域の環境で興味・関心の高いところに目を向けさせ、その理由を話し合わせることによって、人間にとって環境とは、どういうものかを考える。②そして、自然環境に目を向けさせ、帝国書院『中学校社会科地図 初訂版』p.72の「**3** **A**川に沿った日本の風景」を使って、川や里山の役割は何かを考えさせる。この地図帳p.72**3**自然との共生 - 模式図 - **A**をじっくりと見て**7**～**9**を参考にしながら話し合うことによって、里山が土砂崩れや洪水を防ぎ、栄養を田畑や川に与え、生物にとって過ごしやすく、人間にとっても大切なものであることや、川は田畑を潤し、私たちの生活用水として利用され、里山の栄養を海に運び、海の魚介類に栄養を与えるこ



となどに気づかせる。つまり、自然との共生が大切なことが理解できる。③次に、実際に地域を流れている川や周辺の里山の調査を行う。各地にあった里山がなくなりつつあること、国や地方公共団体、地域住民、NPOが「中学校社会科地図 初訂版」p.72 保護していることなどを知る。また、川のコンクリートの護岸工事が、川の汚れや生物の生態系に影響を与えていることなどを知る。そして、生物にとって住みよい環境を理解する。④人間も環境の中で生活をしている生物であることを確認し、昔から里山や川を大切にし、自然との共生をはかってきた知恵を踏まえ、どのように人間が環境に働きかけるのがよいのか、自分が環境に対してできることから実行する。

自分たちが生活している身近な地域の環境について調べて考えさせることは、川の水が沼へとつながり、そして沼から他の河川を流れて、最終的には海へ注ぐという水の循環や環境と生態系を学習させることになる。身近な地域の環境が地元千葉県やさらに日本といった広がりをもつ環境へとつながり、世界の環境について関心をもたせる学習へと発展し、主体的に環境問題について考え、実践できる態度を養ううえで有効であると考えられる。